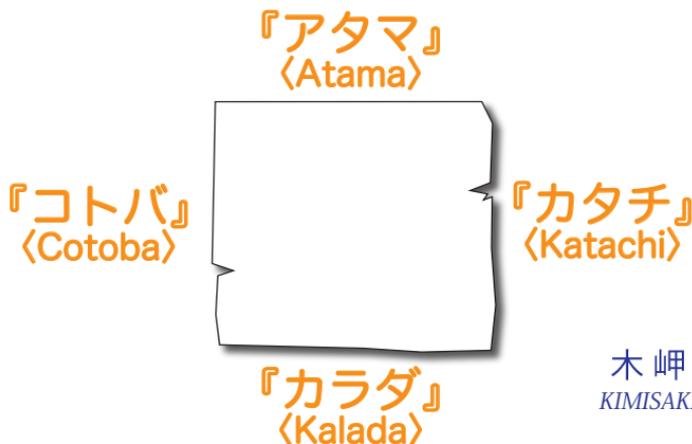


THE 7 FRAMES FOR ALL LIFE

7つのワクワク枠 となりのコンパス①

第1フレーム



木岬 さんぽ
KIMISAKI SAMPO

宝探しに でかけよう！

愛犬ランプベリー、おじいさん…とふれあう
少年期さんぽのフルーツフル成長物語

SAMPO FRUITS



となりのコンパス①

『カタチ コトバ カラダ アタマ』

プロローグ

0

「少年よ——」

「ん？」

「フレーム・フォー・オール・ライフを知っておるじゃろうか？」

「——フレーム…」

「フレーム・フォー・オール・ライフ—— フレー！ フレー！ フレーム、あるいは、ワクワク^{わく}枠^よとも呼ばれておる」

「ううん、知らないよ。——それは、いったい何^{なん}なの？」

「フレーム・フォー・オール・ライフは、すべてのライフのためになる枠^{わく}じゃ。この中のライフ^{なか}には、人生^{じんせい}はもちろん、生活^{せいかつ}、生命^{せいめい}、いのち、生きること… も含^{ふく}まれる」

「すべてのライフって、生まれてから死ぬまでの、だれかの一生のこと？」

「その意味^{いみ}もあるが、みんなのライフの意味^{いみ}でもある。おまえさんからやわし^{ふく}を含む^{ふく}みんなのライフ——。

じゃから、このフレームは、少なくとも、^{すく}今、^{いま}地球上のすべての
ライフのためにもなる」

「——」

「——このフレーム・フォー・オール・ライフが^ぐ具体的に^な何なのか、
^き聞いてみたいと思^{おも}わないかい？」

「——」

「^{すこ}少しは、^き聞いてみたいと思^{おも}うじゃろう——」

「——。 ——。 ——」 ……

ニッコリ心^{こころ}笑^えむおじいさん。「そうか——」 おじいさんは、
^{かる}軽^{かろ}くうなずと、ゆっくりと^た立^あち上^あがった。「——うむ。では、わしは、
^{かえ}帰^{かえ}るとするかの。

——じゃあ、^{たつしや}達^{たつしや}者^{しや}でな」

おじいさんは、やわらかな^え笑^えみを^う浮^うかべながら、^う上^うに向^むけた^{おやゆび}親^{おやゆび}指^{ゆび}
^{ぜんご}を^{うご}前^{ぜんご}後^{うご}に^ふ動^{かえ}かして^{おも}振^{おも}り返^{ある}ったと思^{はじ}うと、ゆっくり^{はじ}歩^{はじ}き始^{はじ}めた。

——ああ、^い行^いってしま^いう。

おじいさんの^{うし}後^{うし}ろ^{すがた}姿^{すがた}は、だんだん^{ちい}小^{ちい}さく^{ちい}なり—— ついに^み見^みえな
く^なった。

それまでの^{えい}いき^{えい}さ^がつが、しばらく^{あたま}映^{あたま}画^{なか}の^{なが}よう^{なが}に^{なが}頭^{なが}の中^{なが}を^{なが}流^{なが}れた。

音楽——テーマ曲イン

♪ハーモニー Harmony

タイトル流れて。

——音楽フェード・アウト

1

その^{であ}出会いは、とても不思議^{ふしぎ}だった。

中学^{ちゅうがく}に入って^{はじ}初めての^{しよか}初夏—— そもそものきっかけは、“それ”
を^{うみべ}海辺の^{すなはま}砂浜^みで見つけたことだ。

——ん？ 何^{なん}だろう？

キラリと輝^{かがや}く何か^{なに}が砂浜^{すなはま}の上^{うへ}に見えた。

近づ^{ちか}づいてみると、流れ着^{なが}いたで^つであろう1本の^{ぼん}ピンだった。

その中^{なか}には、紙^{かみ}が折^おりた^{はい}たんで入っていた。

——手紙^{てがみ}？

それを^{なか}ビンの中^とから取^だり出^{ひろ}して広げてみると、そこには^{じもと}地元の
地図^{ちず}が描^{えが}かれていた。よく見ると、岬^みの先端^{みき}近く^{せんたんちか}に○印^{じるし}があった。

——宝^{たから}の地図^{ちず}？

一緒^{いっしょ}に連れて来^きていた愛犬^{あいけん}のランブベリーが、しっぽ^{いっぽ}を勢^{いきお}いよく
振^ふっていた——。

まもなく、それが“宝^{たから}の地図^{ちず}”であると確信^{かくしん}した僕は、決^{ぼく}めたん
だ。

うん。

ランブベリーの散歩^{さんぽ}もかねて——

宝探^{たからさが}しに出^でかけよう！

ここから、そのすべてが始^{はじ}まったんだ。

2

急いで帰宅した僕は、大きなシャベルを手にとると、さっそくランプベリーと一緒に出発した。

目標ポイントにたどり着くためには、予想外に、急な坂を上らなければならないくて――

「ハア、ハア、ハア……」

坂を上り終えたとき、僕の息は乱れきっていた。

――前方を見やると、下り勾配の先にキラリと輝く何かがあることに気づいた。

音楽フェード・アウト ♪夏 Summer

――お！？

全身に力がみなぎった。

あれは、きっと、探し求めた宝物だ！

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky 途中から

シャベルを強く握りしめると、顔をほころばせながらランプベリーとともに勢いよく坂を駆け下りた。

よっしゃあ！

音楽 ♪ Soaring Up Into The Sky 3 に続く

3

そのキラリに近づくとつれ、少しずつスピードを緩めた。
 そばに立ち止まってキラリを見ると、それは、丸い石だった。
 さっそく、その石に手を伸ばそうとしたとき、自分の目を疑った。
 ——え!?

なんと、すぐそばに、人が横たわっていたのだ。
 な、なんで、こんなところに人が!?

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

見るからに日焼けしている見ず知らずのおじいさんが、つばの広い帽子を、深くかぶりながら横になっている——。

このとき、その丸い石のことに気をかける以前に、コワイ疑問が心に浮かんだ。

生きているのか!? それとも……

よく観察すると、おじいさんのお腹が、ゆったりと上下しているのがわかった。

とっさに頭の中で考えた。

——うん。“さわらぬ神に、たたなりなし”だ。

さっさと、この場から立ち去ろう。

——行くよ、ランプベリー。

ランプベリーの方へ振り向いた僕は、目を大きく見開いた。

ギョ!?

ランプベリーが、おじいさんの顔^{かお}をペロペロとなめていたのだ。

帽子をずり動かしながら——

こらあ！ ダメだ！ 心^{こころ}の中^{なか}で叫^{さけ}びながら、ひもを引^ひっぱった。

ランプベリーも負けじとばかりに、ふんばった。

お互^{たが ゆず}い譲^あり合^あわずにいると——

ムクッと、そのおじいさんが動^{うご}き始^{はじ}めた。

！！ ———言葉^{ことば}にならなかった。

ドキドキドキ…

おじいさんは、ゆっくり上半身^{じょうはんしん}を起^おこし、帽子^{ぼうし}をかぶり直^{なお}した。

かと思うと、口^{くち}を開^{ひら}いた。

「何^{なに}しておる？」

ドキドキドキ…

「あ、ハイ。ぼ、僕^{ぼく}は—— た、たか、た、退屈^{たいくつ}だったから？」

——ラ、ランプベリーの散歩^{さんぽ}？」 ドキドキドキ…

とっさに“宝^{たから}の地図^{ちず}”のことは、秘密^{ひみつ}にした。

「ほう、そうか」

「ところで、その丸^{まる}い石^{いし}は、何^{なん}ですか？」 思^{おも}いきって尋^{たず}ねてみた。

「こいつは、わしにとっての大^{たい}切^{せつ}な宝^{たから}物^{もの}じゃ」

「きっと、何^{なに}か、すごい秘密^{ひみつ}が隠^{かく}されているのですね？」

「秘密^{ひみつ}？ そんなふうには、考^{かんが}えたことなかったなあ。

ただの石^{いし}ころ、なんの変^{へん}哲^{てつ}もない1つの石^{いし}、a stone、Ein Stein
じゃと思^{おも}っておった」

「——」

「ただ—— わしの大好き^{だいす}な人^{ひと}からのプレゼント^{たい}じゃったから、大

切せつにしておる。お守おまりのような存在そんざいでもある」

「——どうして、ここに置おいているのですか？」

「わしに、もしものことがあったとき、この丸まるい石いしが近ちかくにあれば—— 今度こんどは、この石いしに気きづいてくれた誰だれかが、この石いしを大事だいじにしてくれるじゃろうと思おもったからじゃ」

「——」 . . .

4

「ところで、それは、何いじゃ？」 そう言いいながら、おじいさんは、僕ぼくが持もっていたシャベルめに目めをやった。

それを、さじつと自じ分ぶんのお尻しりの後うしろまで移い動どうさせた。

「ああ、これは、ヒマだったから——、ちよあつくら穴あなでも掘ほってやろうかなと、——思おもって？」 もう、めちやくちや——

「ほう」

「——」 . . .

——海うみのはるか遠とおくをしばらく眺ながめていたおじいさんは、ふいに、しゃべり始はじめた。

「おまえさん、『ルモウネのジュモン』を知しっておるじゃろうか？」

「え？ ——し、知しらないよ」 まずい。このおじいさん、明あきらかにあやしすぎる。この場ばから、さにっさと逃にげなくては。

「——ん？ どうした？」

「ん？ いや、別べつに」

「では、さいっそく行いくぞ？」

「——」 ——え！？ もう来るの？

「ルモウネ、ルモウネ…」 おじいさんは、何やら唱え始めたんだ。

明らかにまずすぎる。

ああ、緊張しすぎている。

なんだか足が動かない。

高鳴る鼓動。

吹き出る汗。

今にも息が止まりそうな感じ。

全身の筋肉がこわばる感じ。

…

「ルモウネ、ルモウネ… ああ、効いている」

「——」 ——もう効いている！？

「ああ、もうダメだ」

おじいさんの様子をじっと見た。

「——」 ——え！？ 何がもうダメなの？

おじいさんは、ゆっくり姿勢を変え始め、——ん？

完全に横になった。——んん！？

なんだなんだ？ 何がどうして、どうなったんだ？

「じゃ、お休み」

「へ？」

それから、おじいさんは、まぶたを閉じた。

見ると、ランプベリーも、すでにまぶたを閉じて眠っていた。

ルモウネ、ルモウネ…ル、モウネル、モウネル、

——モウネル！？ もしかして、“もう寝る”ってこと？

5

こんなことがあっていいのか！？

むちゃくちゃ、くだらなすぎるぞ。

あんなに、びびって損したぞ。・・・

モンモンとしながら、おじいさんとランプベリーから少し離れた場所に腰を下ろした。

遠くに水平線が広がっているのが見えた。

青空と海の広がり色彩、あわいグラデーション——

水平線が描く、ゆるやかな弧——

はらかな海面上に点在し、うすい影を映す白い雲々——

汗ばんでいた肌を気持ちよく、なでる海からの涼しい潮風——

ああ、気持ちいいや。

——自然は、やっぱりすごいや。

心地よい呼吸を、心ゆくまで繰り返した。

再び地図を広げて見ると——

驚くべきことに、地図の上の○印は、おじいさんが昼寝している場所とピッタリ一致していたんだ。

——なぜ！？

6

意を決して、おじいさんが昼寝している場所に再びアクセスし、話しかけてみた。

「——おじいちゃん？」

「——」 何の反応もなかった。

「——おじいちゃん、そろそろ起きていただけませんか？」

「——」 やはり、何の反応もなかった。

「——おじいちゃん!？」 声を大きくしてみた。

「——」 うんともすんとも言わないおじいさん。見ると、お腹の上下運動が、はっきり認められないことに気づいた。

「おじいちゃん!？」 思わず駆け寄ると、おじいさんの体を揺り動かした。

「——。 ——あ？」 おじいさんは、ゆっくり目を開けた。

「ふうー。驚かさないでくれよ」と僕。

「——ん？ なんじゃ？」

「あれ、す、すみませんが—— そこを、ど、移動していただけないでしょうか？ ——お願いします」 思わず両手を合わせた。

「あっ？ 今は、イヤじゃ。 ——もう少ししたらのお」

「——はい」 ——もう少し？

7

どれくらいの時間が経ったのだろう？

もうあきらめて帰ろうとしかけた頃、おじいさんは、ふと身をおこし始め、そのままゆっくりと立ち上がった。

——ん！？ おもわず身構える僕。

しかし、そんな僕を気にも留めずに——

「ああ、よく寝た。腹も、ほどよく減っているし」

おじいさんは、丸い石をポットに入れると、上に向けた親指を前後に動かすしぐさをしながら、頭を少し片方に傾けた状態で僕に向けて心笑みかけてから、そのまま歩き去った。

なんだ？ なんだ？ …… ——応援してくれているの？

8

ともかくにも、それから、穴掘りに燃えたんだ。

音楽イン ♪ Reconstruction

でも、たとえ穴が僕の体をまるまる隠すくらいにまでなったとしても、宝物が見つかる気配は全くなかった。

目覚めたランプベリーは、ただ、身をかがめて穴をのぞき込んでいるだけだった。

「おーい、少年よ～。夕陽に染まる景色がきれいじゃぞお～」

少し離れた場所から、おじいさんの声が聞こえてきた。

「——」 相手にせず、ガシガシとシャベルを動かし続ける僕。

「よかったら、こっち来て—— 一緒に、摘みたての、いちごでも食わんかあ〜？」

「——」 なんで、よりによって——。女子じゃあるまいし。

グウー … お腹が鳴った。

・・・ ——なんの、なんの！

そのまま掘り続けた。

「もう、そのへんでやめんと、地上に戻れなくなるぞお〜」

「——」 ——んなわけないじゃん。

掘り続けた。

でも、そのあとも、何の成果も生まれなかった。

「——」 ああ、なんだか、むなしくなってきたかも——。

・・・ ——なんの、なんの！

掘り続けた。

「——」 お腹減りすぎて、力が入らなくなってきたかも——。

・・・ ——なんの、なんの！

掘り続けた。

「その調子で掘っていても—— 宝物は見つからんのじゃなからうかあ〜？」

「——」 シャベルの動きをピタッと止めた。

9

ゆう ひ うみ かがや
夕陽が海をキラキラと輝かせていた。

こし お もくもく いきお
腰を下ろしながら、黙々と、勢いよく、いちごをほおぼっている
ぼく わ ふりながら きょう た
僕と、分けてもらったいちごを、シッポを振りながら器用に食べて
いるランプベリ——。

「——」 うめえ～！

「——そんなに、宝物が欲しかったんか？」とおじいさん。

くち なか あじ の
口の中いっぱいの一ちごを味わいつくして、ほとんどすべてを飲
こ み込んだ僕は、ようやく口を開いた。

「このいちご、すっげえ、うまいよ。

こんなにおいしい、いちご、生まれて初めてかも。

——ああ、生き返る～！」 そう言って、さらにいちごをほおぼ
る僕。

「——。そうか—— 宝物を、そんなに——」

「——というか、どうして宝物のことを知っていたのですか？」 口
なかのいちごを味わいながら、僕は尋ねた。

「——知らなかった。当てずっぽうで言ってみただじゃった」

・・・ 「——でも、“その調子じゃ宝物が見つからない” って」

「——ん？」

「じゃあ、どんな調子だったら——」

「——はて、どんな調子だったら見つかるんじゃないかのお」

それから、やっと、“宝の地図”のことを、おじいさんに打ち明
けようと決めたんだ。

10

「これが、その宝の地図だよ」僕は、それをおじいさんに見せた。

「お!？」おじいさんは、そのとき明らかに驚きの声を上げた。

「——」

「——おまえさん、これ、どうしたんじゃ？」

「近くの海の砂浜で拾ったんです。ビンの中に折りたたんで入って
いて——」

「ほう、そうか——」

おじいさんは、そう言いながら地図を受け取ると——何も話さ
ず、しばらく地図をじっと眺めた。

そうして、おじいさんは、僕に地図を返すと、おもむろに口を
開いたんだっけ——。

「少年よ——」

「ん？」

「フレーム・フォー・オール・ライフを知っておるじゃろうか？」

「——フレーム……」

「フレーム・フォー・オール・ライフ—— フレー! フレー! フ
レーム、あるいは、ワクワク枠とも呼ばれておる」

「ううん、知らないよ。——それは、いったい何なの？」

「フレーム・フォー・オール・ライフは、すべてのライフのために
なる枠じゃ。この中のライフには、人生はもちろん、生活、生命、い
のち、生きること… も含まれる」

「すべてのライフって、生まれてから死ぬまでの、だれかの一生の

こと？」

「その意味もあるが、みんなのライフの意味もある。おまえさんらやわしを^{ふく}含むみんなのライフ——。

じゃから、このフレームは、^{すく}少なくとも、^{いま}今、^{ちきゅうじょう}地球上のすべてのライフのためにもなる」

「——」

「——このフレーム・フォー・オール・ライフが^{ぐたいてきなん}具体的に何なのか、^き聞いてみたいと思わないかい？」

・・・ ——ニッコリ心笑むおじいさん。

^{うえ}上に向けた^む親指を^{おやゆび}前後に^{ぜんご}動かしながら、^{うご}頭を少し^{あたま}傾けている、^{すこ}おじいさんの^{かたむ}やわらかな^え笑み。

——^{けつきよく}結局、^{ぼく}僕は、^{はし}おじいさんを^お走って追いかけることにした。

^{あゆ}歩みを^と止めて、^む向きを^か変えるおじいさんに、^{ぼく}僕は^い言った。

「——あの、やっぱり、^き聞いてみたいです。ハア、ハア……」

「——ん？ なぜ？」

「——。 ——な、^{なん}何となく？ ハア、ハア……」

「——うむ、よかろう。 ——では、もう^{いちど}一度、^{ちず}その^か地図を^か貸してくれるかい？」

「あ、ハイ」 ^{ぼく}僕は、^{いき}息を整えながら^{ちず}地図を^さ差し出した。

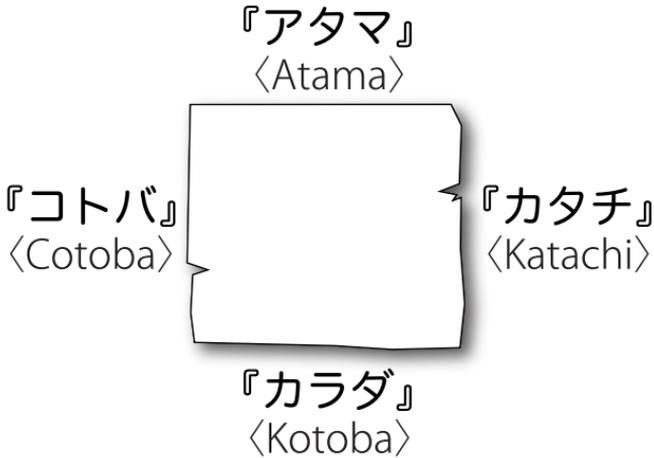
おじいさんは、^う受け取った^と地図を^{うらがえ}ゆっくりと裏返した。

^{うら}裏は、^{なに}何も^か書かれていない^{はくし}白紙だった。

「では、^い行くぞ？」

「え？ ——さ、^こさあ来い」

第1フレーム



11

「『カタチ コトバ カラダ アタマ』

じゃ」裏^{うら}の白紙^{はくし}の上^{うえ}で、同時^{どうじ}に、4つ
の方向^{ほうこう}を順^{じゆん}に指さ^{ゆび}すおじいさん。

「——」

「ふつうの地図^{ちず}の枠^{わく}の場合^{ばあい}には、4つ
の方向^{ほうこう}に『東^{とう} 西^{さい} 南^{なん} 北^{ほく}』が来^くるじゃ

ろ？」表^{おもて}にした地図^{ちず}の上^{うえ}で、同時^{どうじ}に、
4つ^{ほうこう}の方向^{じゆん}を順^{ゆび}に指さ^{ゆび}すおじいさん。

「うん」

「すると、このフレーム・フォー・オール・ライフ^{ぼあひ}の場合^{ばあい}には、
4つ^{ほうこう}の方向^くに『カタチ コトバ カラダ アタマ』が来^くるんじゃ」
再び^{ふた}、地図^{ちず}を裏返^{うらがえ}した白紙^{はくし}の上^{うえ}で、同時^{どうじ}に、4つ^{ほうこう}の方向^{じゆん}を順^{ゆび}に指さ^{ゆび}
すおじいさん。

音楽イン ♪心地よき日々 Comfortable Days

「——ん？」

「『カタチ コトバ カラダ アタマ』、

『カタチ コトバ カラダ アタマ』、

カ、コ、カ、ア、カ、コ、カ、ア——

カッコー、カアー♪ カッコー、カアー♪ 鳴^ないてる～♪

じゃな。アッハッハッ！」

「——」 . . .

「まずは—— “ライフ^{ほうこう}の方向^{おも}”だと思^{おも}ってみてごらん」

『アタマ』
<Atama>



『カラダ』
<Kotoba>

『北』



『南』

『西』

『東』

「ホウコウ？」

「そうじゃとも。“^{ほうしん}方針、^{ほうかく}方角、^{ほうい}方位、^む向き…”という意味の“^{ほうこう}方向”。

つまり、“^{かた}ライフのあり方”じゃな」

「^{かた}ライフのあり方——」

「そうじゃ。じゃから、^{たと}例えば、^{いま}今、^{じぶん}自分が、どの^{ほうこう}方向にいるのか、どの^{ほうこう}方向に向かおうとしているのか…などの、さまざまな“^{かた}ライフのあり方”を、すべてのライフのための^{わく}枠、フレーム・フォー・オール・ライフは、^{おし}教えてくれるんじゃ」

「——」

さまざまな“^{かた}ライフのあり方”を

すべてのライフのための^{わく}枠

フレーム・フォー・オール・ライフ

は、^{おし}教えてくれる

12

「まずは、この『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠を利用して、さまざまな地図を作ってみれば、その意味がわかりやすくなるじゃろう」とおじいさん。

「地図？」聞き返す僕。

「そうじゃとも。」

ふつうの『東 西 南 北』の枠を利用すれば、例えば、砂浜、公園、お店、学校、家…などのお互いの方向関係がわかる。それをもとに、それぞれを『東 西 南 北』の枠の上に配置すれば、地図が完成する。

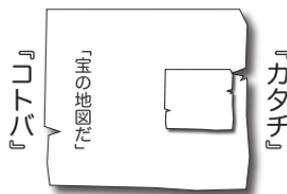
まあ、極端な話、例えば、西に公園、東に家を配置するだけでも、1枚の地図が完成する」

「——」

「一方、この『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠を利用すれば、いろーんなライフどうしのお互いの方向関係がわかる。それをもとに、それぞれのライフを『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠の上に配置すれば、やはり地図が完成するんじゃ」

「——。——ん？」

「例えば、これを見て『宝の地図だ』と言葉にする人生が、こっちの『コトバ』の方向にあるとすれば、これを見るままの人生は、こっちの『カタチ』の方向に



(言葉にする) (見るまま)

ある—— そんな地図^{ちず}を完成^{かんせい}させることができる」

「——」 . . .

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 13 に続く

13

「地図^{ちず}と言っても、これは、ちょっとした“プチ・マップ”じゃがの」

「プチ・マップ——」

「プチといえども、やっぱり地図^{ちず}は便利^{べんり}じゃ。

なぜなら、いったん地図^{ちず}が完成^{かんせい}してしまえば、“今^{いま}、自分^{じぶん}は、どの方向^{ほうこう}にいるのか、どの方向^{ほうこう}に向かおうとしているのか”が一目瞭然^{いちもくりょうぜん}となるのじゃからのお。

——まあ、それはふつうの地図^{ちず}の場合^{ばあい}と同じ^{おな}じゃな」

「——」

「もちろん、もし、道路^{どうろ}の案内^{あんない}標識^{ひょうしき}や看板^{かんばん}などの目印^{めじるし}が充実^{じゅうじつ}しておったり、その土地^{とち}に住^すんでいる方が近く^{かた}におられたりすれば、たとえ地図^{ちず}がなくとも、道^{みち}に迷^{まよ}わずに目的^{もくてき}地にたどり着^つけるじゃろう。じゃがのお、実際^{じっさい}には、そういった目印^{めじるし}や道先^{みちさき}案内^{あんない}人に出会^{であ}えないような場面^{ばめん}も多^た々ありうる」

「そんなときは、地図^{ちず}が役立^{やくだ}つんだね」

「そうじゃとも。」

しかも、実際^{じっさい}には、未^{いま}だ地図^{ちず}のない前人^{ぜんじん}未踏^{みとう}の地^ちを進^{すす}むべき場面^{ばめん}や、新^{あら}しい領域^{りょういき}を開拓^{かいたく}すべき場面^{ばめん}、あるいは、未^まだ誰^{だれ}も経験^{けいけん}してい

ないような未来を切り開くべき場面もあるかもしれん。そのような
未知の場面では、地図を限りなく新しく作れる、フレームやコンパ
スが大いに役立つじゃろう」

「——コンパス？」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 14 に続く

14

「『東 西 南 北』の枠がコンパスを提供できるように、『カタチ
コトバ カラダ アタマ』の枠もコンパスを提供できるんじゃ。
フレーム・フォー・オール・ライフから生まれたコンパスじゃから、
コンパス・フォー・オール・ライフじゃな」とおじいさん。

「コンパス・フォー・オール・ライフ——」

「このコンパス・フォー・オール・ライフからでも、フレーム・フ
ォー・オール・ライフからでも、ライフのあらゆる状況に合わせて、
さまざまなプチ・マップを作ることができるじゃろう。

——まあ、いずれからにせよ、こうして完成したプチ・マップた
ちは、ライフの分岐点になる」

「ライフの分岐点——」

「むろん、『東 西 南 北』のコンパスの針が指し示す方向が進
むべき方向であるとは限らないように—— コンパス・フォー・オー
ル・ライフの針が指し示す方向が進むべき方向であるとは限らない」

「——え？ じゃあ、何が進むべき方向を教えてくださいの？」

「“オール・ライフそのもの”が^{おし}教えてくれるのじゃ。どこに^む向かうべきか、どの^{ほうこう}方向に^{すす}進むのがよいかを^{おし}教えてくれるのは、“オール・ライフそのもの”にほかならない」

「^{おし}教えてくれるのは、オール・ライフそのもの——」

どこに^む向かうべきか

どの^{ほうこう}方向に^{すす}進むのがよいか

^{おし}を^{おし}教えてくれるのは

“オール・ライフそのもの”

15

「さらには、このように“完成したプチ・マップをどのように活用するか”だけでなく、“どの完成したプチ・マップを選ぶのか”を教えてくれるのも、オール・ライフそのものじゃ」

「——え？」

「例えば、“おもしろい-つまらない”のプチ・マップを持っている人生と“安心-不安”のプチ・マップを持っている人生——

例えば、“ために生きている-おかげで生きている”のプチ・マップを持っている人生と“勝つ-負ける”のプチ・マップを持っている人生——

例えば、“愛している-憎んでいる”のプチ・マップを持っている人生と“好かれる-嫌われる”のプチ・マップを持っている人生——

例えば、“行動する-考える”のプチ・マップを持っている人生と“いい方に考える-悪い方に考える”のプチ・マップを持っている人生——… それぞれの人生が大切にしているもの、目指しているものが根本的に違っているように感じないかい？」

「——そうだね。確かに、そう感じるよ」

「うむ。このように“どのプチ・マップを持っているか”は、その人の価値観や目標を大いに反映しておる。このことは、まさに“どのプチ・マップを選ぶのか”を教えてくれのも、オール・ライフそのものであることを意味しておる」

音楽 ♪心地よき日々 Comfortable Days 16 に続く

どのプチ・マップを^{えら}選ぶのか
を^{おし}教えてくれるのも
“オール・ライフそのもの”

16

「この世の^よ大部分——ライフのすべては、パズルでもある。

^{めいろ}迷路パズル、ジグソーパズル、クロスワードパズル、^{ちえ}知恵の輪、
^{てん}点つなぎパズル、^{すどく}数独、ルービックキューブ…のようなパズル。

このライフのパズルを^と解くカギとしても、プチ・マップは^{やくだ}役立つ
じゃろう」

「——」

「^{たと}例えば、人生の^{じんせい}迷路に、^{めいろ}はまってしまった^{ばめん}場面、人生の^{じんせい}目標^{もくひょう}を再^{さい}

かくにん さいせつてい ぼめん
 確認したり再設定したりしたい場面においても、どんなプチ・マップがふさわしいのか、あるいは、そもそも、どのフレームが有効なのかを確認することが大いに役立つじゃろう」

「——え？ フレームは、1つだけじゃないの？」

「1つだけではない。

『カタチ コトバ カラダ アタマ』は、第1フレームじゃ。

フレーム・フォー・オール・ライフは、第1フレームから第7フレームまで、全部で7つあるんじゃ」

「ええ！？ 7つも！？」

「——少年よ。たった7つ！？ そう思う人生もありじゃよ。なぜなら—— おっと、それは、おまえさんに任せよう」

「——」 音楽フェード・アウト ♪心地よき日々 Comfortable Days

「じゃが、これだけは、はっきり言っておこう。

これは、ただの枠ではない。枠フォー・オール・ライフじゃ」

「——だから？」

「枠と7回繰り返して言ってみてごらん」

「——わくわくわくわくわくわくわく」

「あそれ♪ ワクワクワク、ワクワクワク、ワクワクワクワクワクワク♪ あそれ♪ ワクワクワク、ワクワクワク、ワクワクワクワクワクワク♪」 おじいさんは、三三七拍子のリズムで唱った。「ワクワクしてくるじゃろ？」

「——」 . . .

「これは決して窮屈な枠ではない。ましてやくヨクヨク枠でもない。

視野や可能性を広げてくれるワクワク枠じゃ」

「ワクワク棒——」

「そうじゃ。しかも、このワクワク棒は、フレー！ フレー！
フレームでもある」

「——」・・・

「このフレー！ フレー！ フレームでもあるワクワク棒が7つあるんじゃ」

「——じゃさあ、第2のワクワク棒は何なの？」

「うん。はやる気持ちは、わからんでもない。

じゃが、その前に、まずは、この第1フレームとじっくり付きあ
合ってみてごらん。それだけでも十分に楽しめるはずじゃ。

第2フレームについては、来年、話そう」

「来年？」

「そうじゃ、来年じゃ。この初夏の季節はな、この岬全体が1年で
最も美しくなる季節なんじゃ。その季節に再び会うってのも、なか
なか乙なもんじゃろ？ アッハッハッ！」

17

その晩、僕は、ベッドの上で横になって、ぼんやりと天井を眺め
ながら、その日のことを思い返していた。

あれを見て“宝の地図だ”と思うのが、ライフのあり方の1つ？

・・・ ——うーん、だから、何なのだろう？

ああ、宝探しをやってみたかったなあ。ガッカリだよ。

—ワクワク^{わく}粋？ —フレー！ フレー！ フレーム？

—フレーム・フォー・オール・ライフ？

—コンパス・フォー・オール・ライフ？

いったい何^{なん}なんだろう？

なんかへんだし—— それに7つもあるっていうし——

...

—アレ？ 何^{なん}だった^だっけ？ 第^{だい}1フレーム^めって——

... —^{わす}れた？

どうでもよかったけれど、少しも^{すこ}つたいないような^き気がしたの
で、ゆっくり^{おも}思い返^{かえ}してみることにした。

...

—あっ！ カッコー、カアー♪ カッコー、カアー♪
鳴^ないてる～♪ だ！

カコ、カコ、カコ… 『カタチ』と—— 『コトバ』？

カア、カア、カア… 『カラダ』と—— 『アタマ』？

まあ、一^{いち}応^{おう}、^{わす}忘れないように^か書き留^とめておこうか——。

ベッドから^お起き上^あがった^{ぼく}僕は、机^{つくえ}の上^{うえ}で、4つの^{ほうこう}方向^ちを^ず地図^{うら}の裏
に^{えんぴつ}鉛筆^かで^こ書き込^こんだ。



て^も手に持^もったそれを、しばらく、眺^{なが}めた。

おじいちゃん^{あたま}の頭^みを見る^{じんせい}人生^{からだ}、体^みを見る^{じんせい}人生^み、それぞれが『アタ

マ』と『カラダ』の方向にあるってこと？ ……

——うーん。やっぱりヘンだよ。「これはいったい何なんだい？」

「フレーム・フォー・オール・ライフから生まれた、コンパス・
フォー・オール・ライフでございますう〜♪」

「ワッー！！！」

僕は、とっさに地図を放り投げ、そのままベッドの上に飛び乗った。ひらひらと床に舞い降りる地図。

「か、か、紙から、——声が出た!？」

18

しばらくベッドの上にはいたけれど、何にも聞こえず——

手に持ったときにだけ、話せるってこと？

僕は、再び地図を手に持ってみた。

「コンバンハでございますう〜♪」 その声は、とてもおおらかで、
朗らかで—— 若い紳士のようにもあった。

「こ、こ、こんばんは」 ——！！

コンパスの針の絵が、浮かび上がってクルクル回っているのが
わかった。

「——」 ——夢だ！ これは、ゼツタイ夢にちがいない！

「——」 夢ではないでございますう〜♪

「ワッー!!!」・・・「——わ、わかるの!? ^{こころ なか ほな}心の中で話す
ことも」

「わかるでございますう〜♪」

「——」 ^{ほんとう}——本当かよお?

「——」 ^{ほんとう}本当でございますう〜♪

「——」 !!!

^{いそ}急いで^{ちず}地図を^{つくえ}机の上に^{うえ}置いた。すると、^おコンパスの^{はり}針の^え絵のクルクルは、^{おそ}しだいに^と遅くなり—— ゆっくり止まった。

^{こえ}声に出して^だ話せる^{はな}だけじゃなく、^{こころ}心の中^{なか}でも^{はな}話せるってこと?

19

^{けつぎよく}結局、^{はなし}いろいろ話を^き聞けるかもしれないと思^{おも}った^{ぼく}僕は、^{さいど}再度、
ペーパー・コンパスを^て手に^も持^もててみた。

「ほーい♪ ^{なに}何か^{ごよう}御用で^{かいてん}ございましょうか〜? ♪」 ^{かいてん}回転している
コンパスの^{はり}針の^え絵——。

「^{ぼく}僕の名^{なまえ}前は、^{さん}さん^ぼぼです」

「^{きみ}君の名^{なまえ}前は、^{なん}何^{なん}ですか?」

「^{わたくし}わたくし^{なまえ}の名前は、コンパスでございますう〜♪」

「——」・・・「^こコ、^{コン}コンパス、^ああ、^{あの}あの、^{その}その、^{おし}教えてほし
いんだ。^{みさき}岬^でで^あ出会った、^{しやうたい}おじいちゃん^のの^{しやうたい}正体は?」

「デアッタ? ——」

「^{ほら}ほら、^{いた}いた^{じゃん}じゃん。岬^のの^ああの^{ところ}場所に、^{ほら}ほら、^{ほれ}ほれ、^{あれ}あれ、^{おやゆび}親指^をを

立てて、前後させて、心笑んでいた——」

「イタジャン？ ココエンデイタ？

——わからないでございませう～♪」

「——え？」・・・「——じゃさあ、この『カタチ コトバ カラダ アタマ』の枠を利用したプチ・マップの作り方は？ どんな作り方があるんだい？」

「プチ・マップの作り方は、フレーム・オーナーのお好みでございませう～♪

「フレーム・オーナー？」

「フレーム記入者、および、フレーム・ホルダーのことでございませう～♪」

「——そ、そうなんだ」・・・「——ふわあああ～」

なぜだか、大きなあくびが出た。

それから僕は、枕元にペーパー・コンパスを置きながら、再び、ベッドに横になった。

20

目を覚ますと、外は、もうすでに明るくなっていた。

もう朝かあ——。

ベッドで上半身を起こした僕は、何かの気配を感じた。

その方向を見ると——

「ええ！？」

そこには、床から数十センチの空中にフワフワと浮かんでいる
ペーパー・コンパス、いや、コンパスの姿があった。

それも、僕の体より一回りほど大きくなって――。

「おはようございますですう～♪」 コンパスの朗らかなあいさつ。

「お、おはよう」 目をぱちくりしながらあいさつを返した。

僕が床の上に降り立つと、コンパスは一部を傾け、チョイチョイと床をノックした。

・・・ ―え？

戸惑っていると、コンパスは、再び床をノックしながら言った。

「よろしければ、どうぞでございますう～♪」

「――えっ？ 乗ってみてもいいの？」

「そうでございますともお～♪」

コンパスの上に、おそろおそろ四つんばいになってみた。

コンパスの厚みが増しているおかげで、破ける心配もなさそう
だった。それから、コンパスの上はじを軽くつかんでみると――

「しっかり、つかまっているのでございますう～♪」 コンパス
は、そう言うやいなや、僕を乗せたまま、2階の窓から、ふわっと
外へ飛び出て行ったんだ。

「ウ～ワッ！！」

音楽イン ♪ Soaring Up Into The Sky 21 に続く

21

いえいえ ^{した} ^{なが}
家々が下を流れている——。

「す、すごいよ！ ^{そら} ^と 空を飛べるなんて！」

「ありがとうございますですう〜♪」 そう返事したコンパースは、
今度は、^{こんど} ^{そらたか} ^ま ^{あが} ^{はじ} ^{うえ} ^{うえ}—— ^{いえいえ} ^{どうろ}
森や川が、^{もり} ^{かわ} ^み ^み ^{とお} 見る見る遠ざかっているのがわかった。

しばらくすると、スピードが^{ゆる} ^{せいし} 緩み、静止した。

そこは、^{じもとぜんたい} ^{いちぼう} ^{じょうくう}
地元全体をゆうに一望できるほどの上空だった。

その海岸線の形は、^{かいがんせん} ^{かたち} ^ち ^ず ^み ^{おな}
地図で見えていたのとほとんど同じだった。

^{ぜんぼう} ^み ^み ^{ひかく}
前方を見やると—— これまで見たのとは比較にならないほど、
はっきり丸みを帯びている^{まる} ^お ^{すいへいせん} ^め ^{はい} ^{たいよう} ^{ひかり}
水平線が目に入った。太陽の光があたっ
ている^{かいめん} ^{ひょうげん} ^{うつく} ^{かがや}
海面は、表現できない美しさでキラキラ輝いていて——。

「行ってみたい場所は、^い ^{ぼしよ} ございませんでしょうか〜？♪」

「え？ そうだなあ——。 ——とりあえず、^{みき} あの岬？」

「はい、かしこまりましたでございませう〜♪」 コンパースは、
そう言うと、^い ^{かつくう} ^{はじ}
スムーズな滑空を始めた。

^こ ^ち ^{かぜ} ^{ぜんしん}
心地よい風が全身をなでている——。

「ああ、^き ^も 気持ちいいや！」

^{みき} ^む ^{のぼ} ^{ざか} ^{じょうくう} ^{ゆうゆう} ^と ^こ
岬へと向かうあの上り坂の上空を悠々と飛び越え——

「ヤッホー！ ラクチン、ラクチン！」

^{れい} ^{くだ} ^{こうばい} ^{ころ} ^み
例のくだり勾配にさしかかる頃、そのポイントを見やると、キラリ
が^め ^{はい} 目に入った。

「あっ、おじいちゃんだ！ また、あそこで^ね 寝てらあ。これじゃ、

あさね
朝寝だよ。

——お～い！！」 お腹^{なか}の底^{そこ}から声^{こえ}を張り^は上げて^あみた。

そうして、コンパスがそのキラリ^{じょうくう}の上^つ空^うにたどり着^つこうとする、
まさにその瞬間^{しゆんかん}、僕^{ぼく}の目^めは大き^{おお}く見開^{みひら}いた。

「え！？」

そのキラリ^{しょうたい}の正^{あさ}体^{ようこう}は、朝^{ほんしや}の陽^か光^がが反^か射^がして輝^かく——

——宝箱^{たからばこ}！？

音楽フェード・アウト ♪ Soaring Up Into The Sky

22

しかし、コンパスは、そのままスーッと素^す通^どりした。

「わあ！ ストップ！ ストップ！」

コンパスは、何^{なん}の反^{はん}応^{のう}も返^{かえ}さず、海^{うみ}の上^{じょうくう}空^{すず}を進^{つづ}み続^{つづ}けた。

「宝^{たから}だ！ タ、カ、ラ！ あそこ^{たからばこ}に、でっかな宝^{たから}箱^{ばこ}があ^あったぞ！」

それでも、コンパスは、そのままグングン進^{すす}み続^{つづ}け—— だん
だん^{かいめん}と海^{かい}面^{めん}スレ^すスレ^れにま^{ちか}で近^{ちか}づいた。

かと思うと、次^{つぎ}は、グイーンと急^{きゅうじょうしやう}上^{じやう}昇^{じやう}を始^{はじ}めた。

「うわあああ…！ ——どうしたんだあ！？ 大^{だいじやう}丈^ぶ夫^ぶかあ！？」

コンパスは、全^{まった}くお構^{かま}いなし^しだった。それ^あからしば^らく^くの間^あ、
ジグザグしたり、クルクル回^{かいてん}転^{てん}したり—— コンパスは、上^{じやう}下^げ左^さ
右^{ゆう}にメ^めチ^ちャ^ゃク^くチャ^{ちや}な方^{ほう}向^{こう}転^{てん}換^{かん}を繰^くり返^{かえ}した。

両^{りやうて}手^てと両^{りやうて}腕^でがジ^じワ^わジ^じワ^わ疲^{つか}れて^{つか}きて—— コンパスにしがみつ^{つか}い

ているのがやっとなってきた。

「まずい—— ^{ちから}力が^{はい}入なくなってきたよ」

そのとき何^{なに}やら聞^きこえ始^{はじめ}めた。よく耳^{みみ}をすますと——

「…ルモウネ、ルモウネ、ルモウネ…」

「だから、寝^ねなくていいっていうの！ こら、寝^ねるなあ！ 寝^ねるな！
寝^ねるな！ …」

「…モウネル、モウネル…」

しばらくすると、コンパースは、推^{すい}進^{しん}力^{りよく}と浮^ふ揚^{よう}力^{りよく}の両^{りやう}方^{ほう}を完^{かん}全^{ぜん}に
失^{うし}い、僕^{ぼく}と一^{いつ}緒^{しょ}に海^{うみ}へと真^まっ逆^{さか}さまに落^ら下^{つか}し始^{はじめ}めた。

「うわあああああああああああ……！！」

——ゴトツ。

ベッ^{ゆか}ドから床^おへ、ずり落^めちて目^め覚^{ざめ}めた。

しばし^{ぼうぜん}呆^{ぜん}然^{ぜん}——。

て ^{うで}手^{つか}と腕^{また}の疲^{かん}れは、全^{ぜん}く感^{かん}じなかつた。

ああ、夢^{ゆめ}でよかつた——。

心^{しん}底^{そこ}、そ^{おも}う思^{おも}つた。

床^{ゆか}にひざまずいたま^{あか}ま、すつかり明^まるくなつてい^{まじ}る窓^{そと}の外^{そと}をし^まば
らく^{なが}ボーつと眺^{なが}めた。

ふと見^みると、地^ち図^ずも床^{ゆか}の上^{うへ}に落^{おち}ちていること^きに気^きづいた。

・・・ ——あれ？

どこ^{げんじつ}までが現^{げん}実^{じつ}？ どこ^{ゆめ}からが夢^{ゆめ}？

23

地図の裏には、しっかり、『カタチ コトバ カラダ アタマ』
の文字が残っていた。

ってことは、少なくとも、あそこまでは現実だ。うん。

・・・ —あっ！ 夢と現実って、プチ・マップの作り方と
関係がありそうじゃないか？

・・・ —あっ！ もしかして—

新しいプチ・マップの作り方がひらめいた僕は、コンパースの存
在が夢か現実かハラハラしながら地図を手を持ち、話しかけてみた。

「おーい、わかる？」

「—あつ、ほいほうい〜♪」 コンパースの応答があった。

ああ、よかった。こっちも現実だ！ 「—おはよう！」

「オハヨウでございますう〜♪」

「あれ、わかったかもしれない。新しいプチ・マップの作り方」

「ほういー？♪」

「えっと、例えば、眠っている間に夢を見る——想像の中で見たり
想像の中で聞いたりする、つまり、頭の中だけでとらえる人生が

『アタマ』の方向にあるとするだろ？」

「ほういー♪」

「すると、例えば、現実をとらえる——実際に
目で見たり実際に耳で聞いたり実際に手でふれ
たりする、つまり、体を通じてとらえる人生が
『カラダ』の方向にあるんだよ」

「ほいほういー♪」

『アタマ』

夢を見る
(頭の中だけでとらえる)

現実をとらえる
(体を通じてとらえる)

『カラダ』

「それから、^{たと}例えば、^{こころ}心の中で^{かいわ}会話する——^{あたま}頭
^{なか}の中で^{かいわ}会話する^{じんせい}人生が『アタマ』の^{ほうこう}方向にある
 とすれば、^{こえ}声を出して^{かいわ}会話する^{じんせい}人生が『カラダ』
 の^{ほうこう}方向にあるよ」

『アタマ』

頭の中で会話する
 (心の中で会話する)

声を出して会話する

『カラダ』

「ほいほいほういー♪」

「もちろん、^{あたま}頭の中^{なか}だけでとらえることは、ほかにもあるよ。

例えば、^{たと}アイデアがひらめくことだったり、^{そうぞうじょう}想像上^{かんが}で^{すす}考えを進め
 ることだったり、ある^{できごと}出来事^{おも}を^だ思い出すことだったり…。

どれも、^{あたま}頭の中^{なか}に^{なに}何か^{おも}を^う思い浮かべることをベース^{おな}にしているか
 ら、^{おな}同じように『アタマ』の^{ほうこう}方向にあるんだよ」

「——ふわあああ〜♪」 コンパースが^{おお}大きなあくびをした。

「——^{だいじょうぶ}大丈夫？」

「ダイジョウブでございますう〜♪ なんだか、とても^{ねむ}眠たくてし
 かないでございますう〜♪」

「あ、ごめんごめん。そうだったんだね。では、のちほどゆっくり。
 ——^{やす}お休み」

「ふわあああ〜♪ オヤスミでございますう〜♪」

24

コンパースを^{つくえ}机^{うえ}の上に^お置いた^{ぼく}僕は、そのままイスに^{すわ}座り、^{まど}窓の^{そと}外
^{なが}を眺めた。

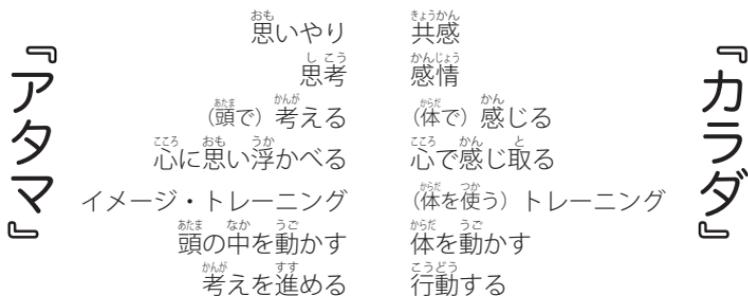
「ふわあああ〜♪ なんだか、こっちまで^{ねむ}眠たくなってきたよ——。

・・・ —ん？ あ、そうだ！

コンパースの^{きも}気持ち^{からだ}を、こちらの^{からだ}体をふるわ
せてキャッチする、^{かんじょうい にゅう じんせい}感情移入^のの人生が『カラダ』
の^{ほうこう}方向にあるとすれば—— コンパースの^{きも}気持ち^{あたま}を頭^{おも}の中で^{えが}思い描く^{そうぞう じんせい}、想像^{そうたいてき}の人生は、^{ほうこう}相対的^の方向にあるんじゃないか？



その^き気づきは、^{ねむけ}眠気^ふを吹き飛ばし、^と新しい^{あた}プチ・マップ^{つく}の作り方^{かた}
を^{つぎつぎ}次々と^み見つけさせてくれた。



・・・

^{こころ}心は、『アタマ』と『カラダ』の^{りょうほうこう}両方向^{かんれん}と関連しているだろう。

^{こころ}心は、^{ひろ}広い^い意味^もを持つのだろう。



そうして、思いのほか、プチ・マップ作りづくに惹かれるようになったひんだ。

25

夏休みなつやすみ—— とある昼下がりひるさにランプベリーとコンパスと一緒いっしょに海辺うみべに来ていたときには、『カタチ コトバ』の方向ほうこうのプチ・マップ作りづくについて思いめぐらせていた。

砂浜すなはまに腰こしを下ろしながら——。

ランプベリーは砂浜すなはまを自由じゆうに駆け回かまわっていた。

ザブーン、ザザザザシュー…

心地こころよい波なみの音おとが響ひびき渡わたっていた。

水平線すいへいせんの上うえには、白しろい雲くもがモコモコしているのみが見えた。

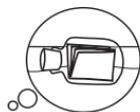
「そうすると、例えば、アレを見るまみまの人生じんせいが『カタチ』の方向ほうこうにあるとすれば、『雲のモクモクだ』と言葉ことばにする人生じんせいは『コトバ』の方向ほうこうにあるってことかあ——」



「ほうい〜♪」

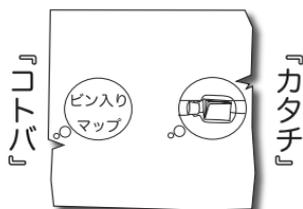
「そう言えば—— ちょうど、あの辺あたりで君きみのことを初はじめて見みつけたんだっけ」

あのときの様子ようすを頭あたまの中に思おもい浮かうかべてみた。



—あっ、そうだ！

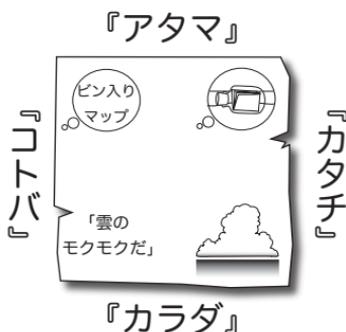
例えば、^{たと}頭の^{あたま}中の^{なか}イメージ^みを見る^{みん}ままの^{じんせい}人生^{じんせい}が『カタチ』の^{ほうこう}方向^{ほうこう}にあるとすれば—— “^いピン^い入り^いマップ” とか^{あたま}と^{なか}頭の^{ことば}中で^{ことば}言葉^{ことば}にする^{ことば}人生^{じんせい}は『コトバ』の^{ほうこう}方向^{ほうこう}にあるって^なことも^な成り^な立つよ。



(言葉にする) (見るまま)

—ほいほうい〜♪

「うん。そうすると—— これらは、1つの^{ちず}地図^{ちず}にまとめることができるよ」



「ほいほいほうい〜♪」

26

「でもさあ、“だから何？”って感じだよな」と僕。

「ダカラ—— 何でございましょう～？♪」

「そうさ」

ちょうどそのとき、ランプベリーが駆け寄り、じゃれついてきた。ランプベリーの首から胸の辺りをさすってあげた。すると、ランプベリーは仰向けになり—— 気持ちよさそうに、じっとしていた。

ランプベリーのぬくもりが手に伝わるのを感じた。

「アハッ。例えば、こんなふうに手でふれて感じるままの人生が『カタチ』の方向にあるとすれば、“ランプベリーのぬくもり”と言葉にする人生が『コトバ』の方向にあるってことも言えるよね」



(言葉にする) (感じるまま)

「ランプベリーというお名前なのですね～♪」

「そうだよ」——ふと空を見ると、シュークリームの形にそっくりな雲が浮かんでいた。

「ああ、あれは、完璧にシュークリームだね。ああ、うまそう」

グウー… お腹が鳴った。——ああ、お腹が空いた。・・・

「——あつ、そうだ！ ひらめいた！」

「ほうい？♪」

「この『カタチ』の方向にある人生は、何かを見るまま、何かにふれるままの人生だけに限らないと思うんだ。だから、例えば、“おなかすいた”と言葉にする前の、体の中のこの感じをただ感じるままの人生も『カタチ』の方向にあっていいんだよ。きっと——」



(言葉にする) (感じるまま)

「ほーうほうほう〜♪」

「そういう意味で、“おいしい、眠い、気持ちいい、心地よい波の音、座っている、ぬくもり、白い雲が浮かんでいる、おなかすいた…”は、どれも同じなのさ。これらはすべて、言葉にするライフとして『コトバ』の方向に置いて、言葉にする前のさまざまな感じをただ感じるままのライフが『カタチ』の方向に置けるのと対になっているのさ。きっと——。



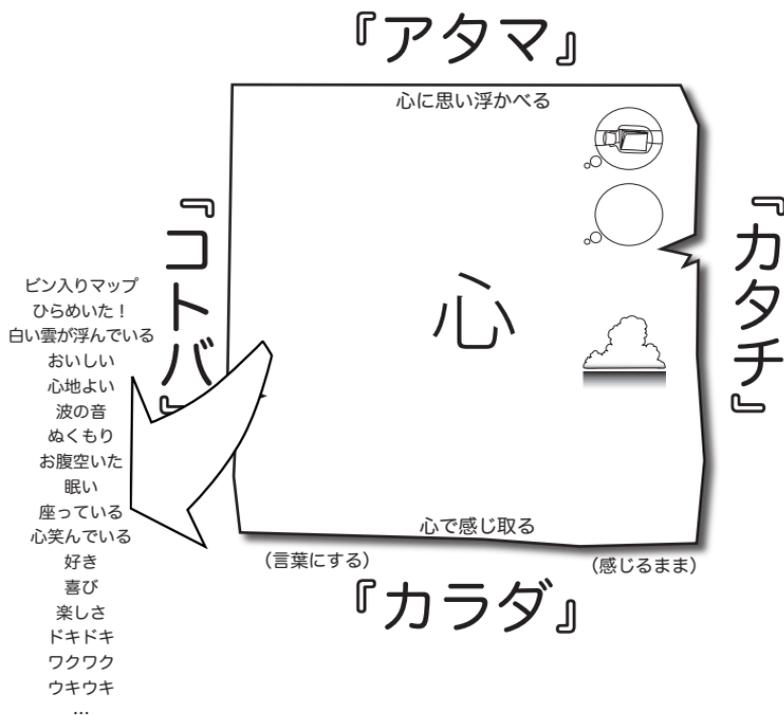
(言葉にする) (感じるまま)

そうすると、心の意味は、もっと広がることになる。

想像やひらめきなどの『アタマ』の方向の心が『カタチ』の方向と『コトバ』の方向に意味が広がるように——

し かく ちやうかく しよつかく み かく きやうかく ないぞうかんかく うんどうかんかく かん
 視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚、内蔵感覚、運動感覚… などの感
 かん や よろ しの たいの かんじょう
 覚や、喜び、楽しみ、ワクワク、ウキウキ、ドキドキ、好き、悲しみ、
 クヨクヨ、ムカムカ、モンモン… などの感情といった『カラダ』
 ほうこう こころ ほうこう ほうこう い み ひろ
 の方向の心も、『コトバ』の方向と『カタチ』の方向に意味が広がるのさ。

つまり、まとめれば、次のようになる」



「ほういほういほうい〜♪」

「——」・・・「——あ、やっぱり、お腹空いたなあ。家に帰って何か食べよう」

27

冷蔵庫の中で冷えていたジューシーな、ももを1つ食べ終えて満足した僕は、ベッドの上で横になると、ぼんやりと天井を眺めた。

——ああ、なんだか眠たいよ。

——少し眠ろう。

まぶたを閉じた。

・・・ ——あっ、またまた、ひらめいた！？

まぶたを開いた。

“眠ろう、何かを食べよう、宝探しにでかけよう…” のように言葉にするだけで、まだ実現していない言葉のままのライフは、『コトバ』の方向にある。

それに対して、『カタチ』の方向にあるライフは——

・・・ ——そうだよ！

実際に眠るとか、実際に何かを食べるとか、実際に宝探しに出かけるとか… うん。つまり、形にするライフが『カタチ』の方向にあるんだ！

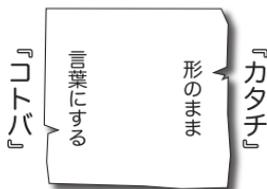


(言葉のまま) (形にする)

28

うみ べ
海辺では——

こと ば
言葉にするライフが『コトバ』の方向ほうこうにあるとすれば、形かたちのまま
のライフが『カタチ』の方向ほうこうにあるってことかんがを考えた。



いっ ぽう いえ かえ
一方、家に帰ってからは——

こと ば
言葉のままのライフが『コトバ』の方向ほうこうにあるとすれば、形かたちに
するライフが『カタチ』の方向ほうこうにあるってことかんがを考えたんだ。



——ライフって、何なに？

“ライフは宝探たからさがした。ライフは航海こうかいだ。

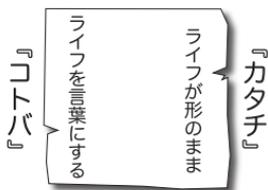
ライフはスポーツだ。ライフは音楽おんがくだ。

ライフは演劇えんげきだ。ライフはフルーツ育そだてた。

...”

いろいろある——。

うん。ライフを^{ことば}言葉にするライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、ライフが^{かたち}形のままライフは『カタチ』の方向にあるだろう。



—どんなライフにしよう？

“^{たの}楽しいライフにしよう。ワクワクするライフにしよう。

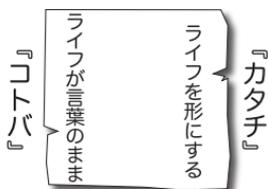
あったかいライフにしよう。^{いろど}彩り^{ゆた}豊かなライフにしよう。

^{ここち}心地いいライフにしよう。フルーツフルなライフにしよう。

...”

いろいろある—。

うん。ライフが^{ことば}言葉のままライフが『コトバ』の方向にあるとすれば、ライフを^{かたち}形にするライフは『カタチ』の方向にあるだろう。



29

まもなく夏が終わり、それから秋が過ぎ、さらに冬が過ぎると、
雪解けの季節になった。

音楽イン ♪春 Spring

春の陽射しが、冬の間に野原に降り積もった雪を片隅に追いやり、
小空花が可憐に咲き始めていた。

新鮮な雪解け水によって、小川の勢いがいくらか増していた。

花の咲き始めた木の枝では、小鳥たちが明るい歌を奏で始めていた。

...

ところが、そのような心浮き立つ季節に、地図の裏に書き入れて
いた文字やコンパスの針の絵は、いつの間にか、すっかり消え、コ
ンパスと全く話せなくなっていた。

——ああ、あいさつできなかったなあ。

なんだかさびしいや。

鉛筆を取った僕は、再び『カラダ アタマ カタチ コトバ』を
書き込もうとした。 ——が、やめた。

これは、きっと、新しい第2フレームをおじいちゃんに教えて
もらうべきだってことなのだろう。

そう思ったからだ。

それに、自分で見つけたプチ・マップの作り方をおじいさんに
披露して、彼をアッと驚かせたかったし——

結局、決めたんだ。

——おじいちゃんに、また会いに行こう。

音楽フェード・アウト ♪春 Spring

30

音楽イン ♪夏 Summer

ランプベリーを連れて岬へ向かって出発したのは、すがすがしい
 青天が広がる、初夏らしい日だった。

今回は、少し荷物があつたけれど、ペース配分をうまく考えなが
 ら坂を上っていたので、余裕があつた。

途中、周囲をよく見渡すと、樹々が豊かに生い茂っているのがわ
 かった。逆光の中、あわく透けて見える木の葉たちの明るい緑が、
 そよ風によって、さやさやとゆらいでいた。

日光で透けた葉っぱって、こんなふうに見えるんだ——。

ふと、荷物を持つ手を替えた。

坂を上りきると、例の、なだらかな下り勾配を見おろした。

その一面には、若草が生い茂っていて—— 白や黄やピンクの花
 々が咲き、モンシロチョウが何匹も舞っていた。

——アレ？ こんなに、きれいなところだったっけ？

その先に視線を向けると、例の場所に、例のキラリが見えた。

「おっ、いるいる。よし——」 ランプベリーのリードをはずした。

「行け、ランプベリー！」 ランプベリーは、勢いよく坂を下ると、
 しつぽを振りながら、おじいさんにじゃれつき、——やっぱおじ
 いさんの顔をペロペロとなめた。

「アッハッハッ！ くすぐったい。こら、やめろ！ アッハッハッ！」

「おーい！ 元気に生き〜ているかあ〜い！？ ♪」 僕が近づきな
 がら呼びかけると——

「おう！ 元気に生き〜とるともお〜！♪」 おじいさんは応えた。

音楽 ♪夏 Summer 31 に続く

31

丸い石を手にとりながら、ゆっくりと起き上がったおじいさんの表情は、やわらかかった。

「おう、よう来た！」とおじいさん。

「おう、よう来たぞ！ おお、その丸い石、相変わらず、よく輝いているねえ」 思わず、丸い石の輝きを手でふれてみた。

「じゃろじゃろ？ こいつは、わが自慢の相棒でもある。アッハッハッ！」

「アハハッ！」 一緒に笑った僕は、袋をおじいさんに差し出しながら言った。「これ—— おみやげ」

「お？ なんじゃ？」 おじいさんは、そう尋ねた。

「——トマトだよ。親たちが趣味でやっている家庭菜園で採れたんだ。持って行ってあげなさいって——」

袋の中をのぞき込むおじいさん。「おお、新鮮で立派なトマトじゃ。——ありがとうございます。親御さんたちは、トマト作りの名人じゃのお」 そう言いながら、うれしそうに袋を受けとるおじいさん。

「——ところで、この袋もなかなか立派じゃのお。あとで返そう」

「え？ ——いいよ、いいよ。どうせ、なんかの使い古しだし」

「いやいや、そうはいかん。長持ちする、よい買い物袋などにも使えそうじゃよ。」

わしが持^もっておつても、宝^{たから}の持^もち腐^{くさ}れになるだけじゃ

「——」・・・「——うん。わかった。

——アハッ！ “リリサイクル”だね？ あっ、“リリユース”？」

「——あつと、たつた今^{いま}氣^きづいたんじゃが、ほれ、ここに、ちゃんと名^な前^{まえ}も書^かいておる。アッハッハッ！」

「アハハッ！ 僕^{ぼく}も今^{いま}初^{はじ}めて氣^きづいたよ」

結^{けつ}局^{きよく}、おじいさんは、その言^{こと}葉^はどおり、のちに、わざわざ、いったん帰^き宅^{たく}してから、その袋^{ふくろ}を返^{かえ}してくれたんだ。

新^{しん}鮮^{せん}ないちごと両^{りやう}親^{しん}へのお礼^{れい}の手^て紙^{かみ}を添^そえて——。

音楽 ♪夏 Summer 32 に続く

32

おじいさんとランプベリーと僕^{ぼく}は、水^{すい}平^{へい}線^{せん}を遠^{とお}くに眺^{なが}めつつ、
並^{なら}んで腰^{こし}を下^おろしていた。沖^{おき}合^あいで、1艘^{そう}の船^{ふね}が、ゆっくり移^い動^{どう}
しているのが見^みえた。

「この1年^{ねん}どうじゃった？ 元^{げん}氣^きにしておったか？」とおじいさん。

「ああ、元^{げん}氣^き！ 元^{げん}氣^き！ ——おじいちゃんの方^{ほう}は？」

「ああ、こつちも元^{げん}氣^きじゃった——」

それから僕^{ぼく}は、第^{だい}1フレイム『カタチ コトバ カラダ アタマ』
を通^{つう}じて、この1年^{ねん}で考^{かん}えたこと、感^{かん}じたこと、やつたことを、い
ろいろ語^{かた}って聞^きかせた。

「エヘン、どうだ、まいったか！」とでも言いたげに——。

「おお、なかなかやるのお。さすがじゃ」^{かんしん}感心するおじいさん。

「さすがじゃろ？ ちょろいもんよ」

「うむ。少年よ——^{しょうねん} そうやって^{かんせい}完成したプチ・マップたちは、かけがえのない、^{いま}今のおまえさんのものじゃ」

「——。 ——え？ どういうこと？」

「これからの、おまえさんの^{せいちょう}成長や^{へんか}変化に^{おう}応じて、フレームの^{かつよう}活用^{ほう}法や^{かんせい}完成するプチ・マップが^{せいじゆく}成熟しうるということじゃよ」

「——うん」

音楽 ♪夏 Summer 33 に続く

^{せいちょう}成長や^{へんか}変化に^{おう}応じて

^{かつようほう}フレームの^{ほう}活用法や

^{かんせい}完成するプチ・マップが

^{せいじゆく}成熟しうる

33

ランプベリーは、そばで昼寝を始めていた。

「ライフが変わること—— それ自体は、決して恥ずかしいことじゃない。それは、ある意味、生きていく証の1つなのじゃからのお」

「生きていくアカシ——」

そのときは、その言葉の意味が、さっぱりわからなかった。

「——それじゃあ、今のおじいちゃんにとってのフレームの活用方法とか、プチ・マップの作り方は？ こう、年の効っていうか、年配者ならではっていうか、——そういうの？」

「ん？ そいつは、おまえさんの将来の“あとのお楽しみ”というのが1番よいように思うんじゃが、——どうじゃろう？」

「——。 あとのお楽しみ——」

「そうじゃとも。 ——うむ。では、そろそろ第2フレームを紹介しようかの」

「よっ、待ってました！」

「例の地図を持ってきたかな？」

「ああ、もちろん」 おじいさんに地図を手渡した。

「——あっ！ 思い出した！」

「ん？ 何をじゃ？」

「あれ、ほれ、それ、地図が、第1フレームから生まれたペーパー・コンパスが、——しゃべった」

おじいさんは、パツと心^{こころ}笑^えんだ。「そりゃあ、ラッキーでありが
たいことじゃ。よかった、よかった——」満足^{まんぞく}そうな笑^えみを浮^うか
べながら、話^{はな}すおじいさん。

そう言^いわれてみれば、何^{なん}となく、そう思^{おも}えてきた。

おじいさんは、地^ち図^ずをゆつくりと裏^{うらが}返^{かえ}した。

「うむ、では、行^いくぞ？ 第^{だい}2 フレーム——」

「ああ、さあ来^こい！」

音楽終了 ♪夏 Summer

7つのワクワク枠 / The 7 Frames For All Life

となりのコンパス①

第1フレーム

『カタチ コトバ カラダ アタマ』

【完】